親性と共育：社会で子どもを育てるために

企　　画：　日本発達心理学会第 35 回大会準備委員会
廣瀬聡弥・大西賢治・藤崎亜由子（奈良教育大学）
司　　会：　大西賢治　（奈良教育大学）
話題提供者：　明和政子　（京都大学大学院）
齋藤慈子　（上智大学）
小島康生　（中京大学）
指定討論者：　根ヶ山光一　（早稲田大学）

[企画主旨]

現在の我が国は，少子化に歯止めがかからず，育児への不安や産後うつを抱える人の増加，虐待相談対応件数の増加などの社会的課題を抱える。出産における医療体制が整備され，妊産婦の生命の安全性が確保されたにもかかわらず，こうした事態が生じる背景には，妊娠，出産，育児がプライベート化する中で社会との回路が閉ざされ，個々の自己責任として扱われてきたことが考えられる。

近年，育児場面において，乳児の表情などの非言語的情報から心を推察し，共感し育てようとする「親性」が注目されている。親性は，乳児と接する機会を持つことによって準備されることがわかっているが，子育てのプライベート化や少子化によって育成されないまま親になったり，親になる前の世代にとって子どもと接する機会の減少により，そもそも子どもを持ちたくない，さらには結婚したくないといったこととも関連していると考えられる。つまり，親性の育成は，親はもとより，社会全体で子どもを共同養育する際においても重要な性質である。また，令和 6 年度に，奈良教育大学附属幼稚園はこども園へ移行する予定である。地域に開き，世代を超えた交流を深め，子どもへの温かい眼差しを共有できるつながりを育みたいと考えている。

そこで，本シンポジウムでは，親性を基盤とする共同養育について，学際的議論を深めるため，脳科学，行動発達学，進化心理学の各研究領域の最先端で活躍されている著名な研究者をお招きした。そして，社会の在り方やこども園等の就学前施設の新しい役割等について，議論する機会としたい。

話題提供①「子育てに適応的な脳と心を育む」

明和　政子（京都大学大学院教育学研究科）

男女共同参画と少子化対策との両立が求められる日本では，父親の育児参加が強く求められている。男性の育児動機を高め，（出産前のできるだけ早い時期から）育児に円滑に参加することのできる仕組みを社会に設計することが急務となっている。とくに，子どもに関わる機会が激減している現代社会では，若い世代の「養育行動に適応的に機能する」脳と心（親性）をいかに育むかも重要な課題となっている。

そもそも，ヒト（*Homo sapiens*）は母親だけによる養育形態により命を繋いできた生物ではない。ヒトは，ひとりの子への養育コストが他の動物に比べて圧倒的に大きい。しかし，母親以外の他個体が養育に関わる「共同養育（alloparenting）」により，母親は短期間で多くの子孫を残すという生存戦略を進化の過程で獲得してきたと考えられている。

最近，社会内分泌学や脳科学の分野では，「親性脳（parenting brain）」とよばれる，養育行動に関連する脳内ネットワークとその生物学的基盤が特定されてきた（e.g., Feldman et al., 2019）。重要なことは，ヒトの親性脳の発達には生物学的性差はみられないこと，また，養育経験の蓄積によって親性脳の構造・機能が可塑的に変容することである。また，ヒトの親性脳の発達にはかなりの個人差がみられる（e.g., Diaz-Rojas et al., 2020, 2021）。

これらの事実は，子どもだけでなく，親もまた社会で育まれるべき対象であることを明瞭に示している。人類の持続的発展，未来社会にとって必要となる社会とは何か，親子の心身の発達を社会で支援するために必要な方法とは何かを，従来の発想を超え，科学的根拠に基づいて考えていく必要がある。

話題提供②「閉じた子育てのデメリットと開かれた子育てのメリット」

齋藤　慈子（上智大学総合人間科学部心理学科）

ヒトは他の霊長類と比べて未熟な状態で生まれ，世話が必要な期間も長く，かつ出産間隔が短いため，複数の手のかかる子を同時に育てることが多いという特徴から，母親単独での子育ては難しく，共同養育をする種であると言われている。しかし，現代の日本では，三歳児神話や母性神話の影響が残るためか，子どもが幼いうちは，母親が子育てに専念するほうがよいという考えに縛られる人，あるいは子育ての全責任は家庭にあり，親（だけ）が子育てをすべきであるという考えにとらわれる人が少なからずいるようである。

たしかに子どもにとって主たる養育者との関係が重要であることは疑いようがなく，その重要性を支持する研究結果は多数報告されている。一方，母親が育児に専念すること，一人で子育てすることの母親における弊害についての研究結果も蓄積しつつあり，その弊害は，子育て支援の現場でも広く知られている。母親は子育てに注力するのが当然，子どもの育ちの責任は親がすべて担うべきという考えは，母親に悪影響を与える可能性があるだけでなく，親の強迫的な「よい」子育て，子育ての「成功」へのこだわりにつながり，教育虐待を引き起こす可能性もあるだろう。家庭に閉じた子育ての弊害について，母親に関してだけでなく，父親や子どもについても議論をする必要がある。

本シンポジウムでは，家庭での閉じた子育てのデメリット，子育て・子どもの育ちに他者がかかわるメリットについて，子ども，保護者，子どもにかかわる第三者，子育て支援事業等運営者の語りからみえてきたものをまとめ，生物としてのヒトの子育て，子育ち環境をヒントにしつつ，現代における課題について考察する。

話題提供③「多様な他者を巻き込んだ子育てのメリット」

小島　康生（中京大学心理学部心理学科）

本来ヒトの子育ては，親（特に母親）に集中しすぎることなく，周囲の他者に緩やかに開かれており，それが短い出産間隔で子を産むことや手のかかる複数の子を同時に育てることを容易にしてきたのではないかと考えられている。実際，狩猟採集生活を送るアフリカの一部の社会では，親以外の他者が次々に子どもに関わり，そうした他者が多数いるほど，母親の出産間隔が短いという報告もなされている（Chaudhary & Swanepoel, 2023; Kramer, 2019 など）。ヒトは進化史上，狩猟採集生活を送っていた時間が長かったことからみても，多くの他者を巻き込んでの「共同養育」が，繁殖戦略上，有利であったとの見方が有力である。

そう考えると,「ワンオペ育児」という言葉が示すようなわが国の現代の子育ては不自然ともいえる。狩猟採集生活の時代にまで遡らずとも，せいぜい 100 年程度前のわが国では，親以外の他者が子どもの養育にもっと深く関与していたものと想像され，子どもの周りには多様な他者が広く存在していた可能性が高い。

いっぽう，わが国のすべての場所が一様にこのような状況なのかというと，必ずしもそうともいえない。筆者が約 10 年前から関わってきた沖縄県の離島（多良間島）での子育てもその好例で，根ケ山（2012）が詳細に検討した「守姉」という風習に代表される通り，大人だけでなく地域の年上の子どもも，乳幼児に積極的に関わることが確認されている。本発表では，多良間島における子育てを例に，親以外の他者が養育（ここでは簡単な世話や遊び相手なども含む）に関与することが，親子，そして第三者である他者にどのようなメリットをもたらすかを議論する。また，筆者が 15 年前から実践している，大学生による子育て家庭への参入の取り組みも紹介し，親に集中しがちな都市部の子育てに第三者が加わることの意義についても考えたい。